

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立岐阜希望が丘特別支援学校

学校番号

104

自己評価

学校教育目標	「明るく 元気に 生き生きと」 ・児童生徒一人一人の実態に応じた「生きる力」を育み、自立と社会参加を目指す。
--------	--

【教務部】

評価する領域・分野	教務部 「教育活動・学習活動」
現状及びアンケートの結果分析等	・教育課程の系統性、通常学級の自立活動時間数など、教育課程についての検討課題がいくつか挙がっている。 ・特別支援学校への（出席簿も含む）校務支援システムの導入に向けて、県の具体的な取組が始まる見込みである。当校では、今年度も引き続き現行のデジタル出席簿を運用していく。 ・令和6年度より小学校教科書が改訂される。 ・「指導と評価の年間計画」の新しい様式、また教育課程Dの学習の系統性を整理した「音楽」「おはなし」の指導計画の運用を開始する。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 教育課程についての課題を整理し、特に知的代替の教育課程において児童生徒の実態やニーズに合った学習の在り方を慎重に検討する。 2 小学校教科書や一般図書の選定、指導書、補助教材等に関わる見直しや手続きを計画的に進め、令和6年度に向けて指導環境を整える。 3 「個別の指導計画」や「指導と評価の年間計画」を軸にPDCAサイクルが働くよう、年間を通して計画的な運用を働き掛ける。
重点目標を達成するための校内組織体制	1 学習グループや部会での情報共有や検討、教育課程検討委員会、教科書選定委員会での審議。 2 教務部会での検討と課題の整理、教育課程検討委員会や就学指導委員会を中心とした審議。 3 学習グループや部会、教務部会での検討。
目標の達成に必要な具体的取組	1 ・教育課程についての課題や見直しが必要な点について部の意見を集約し、教務部会や校内委員会で他部との情報共有を図りながら、改善案をまとめる。 ・「教育課程選択の目安となる発達段階表」を参考に、必要なケースについては発達段階を示す客観的な材料を集め、学習環境や内容の見直しを行う。 2 ・教科書の使用状況や使いやすさについて学習グループごとに確認を求め、より実用しやすい図書の選定について意見を集約する。 ・教科書や補助教材の選定業務を計画的に進めるとともに、予算に見合った指導書及びデジタル教材等の購入計画を立て、指導環境を整える。 3 ・諸計画の確認や見直し、評価について学習グループ内でよく検討されるよう部会等を通じて働き掛ける。 ・後期中頃より次年度の計画立案に向けて検討が進むよう連絡調整をする。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 教育課程に関わる課題について検討を進め、改善に向けての方策や方向性を明らかにできたか。 2 教科書や補助教材等に係る手続きや業務を進め、令和6年度の指導環境を整えることができたか。

	3 「個別の指導計画」や「指導と評価の年間計画」の計画的な運用を推進できたか。
取組状況・実践内容等	・検討課題となっていた自立活動や特別活動の時数や取扱いについての協議を進め方向性を定めた。 ・各教育課程の対象者となる発達年齢の目安や特徴的な様相を踏まえ、数名の児童生徒の進級に伴う教育課程変更についての相談や協議を進めた。 ・令和6年度小学校教科書改訂及び高等部A B類型の主要教科における指導内容の差別化に伴い、教科書や補助教材等の選定業務を進めた。 ・令和6年度からの校務支援システム導入に向け、代表校として検討チームに加わり、様式や運用について委託業者、県担当者、他校代表者と協議や相談を続けている。
評価の視点	評価
1 令和6年度教育課程編成に向けた見直しや確認の呼び掛け、校内会議調整などを計画的に進めることができたか。また、教育課程に関わる課題について検討を進め、方向性を明らかにすることができたか。	A ☒ B C D
2 令和6年度の学習指導（活動）に必要な教科書、補助教材、指導書等に係る業務を進め、指導環境を整備することができたか。	A ☒ B C D
3 校務支援システム導入に向け、現行の諸計画からどう移行させるかについて、県の方針や他校の動向との調整を図りながら自校の方向性を定め、導入準備を進めたか。	A ☒ B C D
成果・課題	総合評価
○進学や進級に伴う教育課程の選択や確認について校内会議で協議を進め、実態に合ったよりよい教育内容や今後の支援方針についてケースごとに整理した。 ○令和6年度から改訂される小学校教科書を中心に教科書選定を公正に進め、それに伴う補助教材や指導用教科書等の教育環境整備を計画的に進めた。 ▲教育課程D 1、D 2の在り方や知的代替の教育課程及び使用教科書の系統性について、学校全体での見直しや検討が必要である。 ▲校務支援システムを活用した帳票作成や管理について、確認事項や検討事項が多く、新年度からの導入準備が整っていない。	A ☒ B C D
来年度に向けての改善方策案	1 校務支援システム導入に伴って、管理や操作、諸帳簿作成上の留意点等について、県の方針と校内で統一したい情報とを整理しながら移行し、軌道に乗せていけるよう案内調整をしていく。 2 中学校教科書改訂に伴う新規採択、また、一般図書や指導書、補助教材などに関わる見直しや手続きを計画的に進める。 3 教育課程C、Dについて、対象となる児童生徒の実態やねらい、高等部卒業後の進路を踏まえた系統性の見直しについて働き掛け、各部の意見を集約しながら令和7年度教育課程に反映させる。

学校関係者評価（令和6年2月5日実施）

意見・要望・評価等 ・校務支援システムを導入することが、教職員の働き方改革につながるとよい。教職員の働き方改革は本当に進んでいるのか。 ・中学校教科書改訂に伴う新規採択について、より実用しやすい図書の選定をしてほしい。

【情報教育部】

評価する領域・分野	情報教育部 「情報教育」「学習支援」「情報機器管理」
現状及びアンケートの結果分析等	・GIGAスクール構想によるICT環境整備の対応と、学校におけるICT利活用のための教職員の技術向上が必要となり、当分掌が新設された。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 情報教育、視聴覚教育の環境を充実させるとともに、タブレットやプロジェクターなどの教育機器を活用して授業が行えるよう情報発信を行う。 2 学校間総合ネットや teams 等の活用を促進し、情報の共有化と作業の効率化を図ると同時に、ホームページ等を通じて学校教育についての理解啓発に努める。
重点目標を達成するための校内組織体制	1 情報教育部内のICT推進担当、情報管理担当、タブレット管理担当 2 情報教育研修会、コア・ティーチャーによる研修会、情報セキュリティ委員会
目標の達成に必要な具体的取組	1 機器の整備と利活用 ・ICT機器についての情報を発信したり、情報教育部内での研修を充実したりすることで、職員のスキルアップを図る。 ・タブレットや視聴覚機器を定期的に点検及び整備することで、情報教育、視聴覚教育の環境を充実させる。 2 情報の共有と発信 ・校内のネットワークを充実させ、情報の共有化と作業の効率化を図る。 ・ICT機器、個人情報の取り扱いについては、定期的に職員全員に注意喚起をする。 ・閲覧する側のニーズに応えられるようホームページを定期的に更新する。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 一人一人の教育的ニーズや学習状況に応じた教育環境を整備し、ICT機器の利活用を推進することができたか。 2 誰もが活用しやすい環境を整え、情報機器や教材の共有化の推進を図ることができたか。
取組状況・実践内容等	1 ・コア・ティーチャーと連携して、情報機器の活用について専門性の向上につながる研修を実施した。 ・タブレット端末や、視聴覚機器の点検や設定の見直し等を行うことで、機器等が使いやすい環境を整備することができた。 2 ・校内のネットワーク環境を調査し、機器の設置や設定の変更を行うことで、情報通信環境等の改善を図ることができた。 ・情報機器の取り扱いや、個人情報の取り扱いについて定期的な注意喚起を継続して行った。 ・定期的にホームページを更新することができた。 ・teams の運用について具体的に提示することができた。
評価の視点	評価
1 一人一人の教育的ニーズや学習状況に応じた教育環境を整備し、ICT機器の利活用を推進することができたか。	A ☒ C D
2 誰もが活用しやすい環境を整え、情報機器や教材の共有化の推進を図ることができたか。	A ☒ C D
成果・課題	総合評価
○コア・ティーチャーと連携して情報機器の活用研修を進めることができた。 ○電子黒板や学習支援ソフト「MetaMoJi」の活用促進について個別に研修を進めることができた。 ○日常的に情報機器の管理、整備を行ったことにより、大きなトラブルなく運用することができた。	

○「スイッチボット」を導入し、小学部1組教室をスマート化したため、児童がタブレット端末を使って電気やエアコン、カーテンの開け閉めを操作することができるようになった。活用事例を teams の教材教具チャンネルに投稿することで、学校全体で情報共有することができた。 ○教育財務課（情報基盤係）と密に連絡をとり、機器の管理や接続申請等をスムーズに行うことができた。 ○個人情報に関する重大な事案が発生しなかった。 ○学校ホームページの定期的な更新により、学校教育の広報を担うことができた。 ▲パソコン室にあるデスクトップパソコンのように、動作不良のものや、バッテリー膨張による不具合のある機器が多数あるが、修繕費不足のため対応できていない。また、機器更新に伴い不要となった情報機器や視聴覚機器（テレビやビデオカメラ）が増え、保管場所がなくなってきた。計画的に修繕依頼や、廃棄を検討する。	A <u>B</u> C D
来年度に向けての改善方策案	1 情報機器の活用についての研修を定期的に行う。 2 情報機器の活用と管理について定期的に注意喚起を行う。 3 情報機器の管理について分掌内で業務分担を明確にする。

学校関係者評価（令和6年2月5日実施）

意見・要望・評価等 ・児童生徒が社会へ出るときにICTを活用できるよう、学校で教えてほしい。 ・ICTの活用が働き方改革につながるとよい。

【学習支援部】

評価する領域・分野	学習支援部 「研修」 「授業力向上」 「学習支援」
現状及びアンケートの結果分析等	・担当する分掌やコア・ティーチャーと連携し、児童生徒への支援や日々の授業につながるような内容の研修を計画的に行っている。 ・昨年度の「授業づくりの日」では、各部各類型各学年等のグループ（以下、学習グループと記す）内の話し合いを土台とし、「児童生徒の様子」や「授業づくり」、「個別の指導計画」や「実態に合った教育課程」等について各学習グループ内で共有することができた。今後は、授業公開を含めた全校体制で学び合う方法について検討する。 ・外部専門家による授業支援、センターリハビリ参観、コア巡回において、複数から助言を得る機会があり、その必要性について検討する。 ・遊具や教材、教具に関して、修繕や破棄に向けた提案を含めた安全管理や整理整頓についての手順や方法などを明確に提示する。 ・「教材・教具の日」に関して、年間を通して学び合いができる取組ができるように検討する。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 実践的な職員研修を計画、実施し、児童生徒一人一人の実態や障がいに応じた根拠ある授業づくりを行うための職員研修を進める。 2 教育目標や重点、各部の重点をもとにした授業づくりや授業改善を提案する。 3 教師が専門家等との連携を実践に役立てることができるようにサポートする。 4 効率よくかつ効果的に、遊具等の安全点検を実施したり、教材や教具について学び合えたりする体制を整える。
重点目標を達成するための校内組織体制	1 校内研修計画 各分掌やコア・ティーチャーとの連携 2 授業力向上委員会 授業づくりの日 3 外部専門家やセンター療法士との連携 遊具の管理及び安全点検

	コア・ティーチャーとの連携（情報教育や教材・教具）	
目標の達成に必要な 具体的取組	1・各分掌やコア・ティーチャーと連携を図りながら、研修会を計画・実施する。 2・本年度も引き続き、学び合いを大切にする雰囲気のもと、教育目標や各部重点を意識し、学習グループの授業公開や授業記録などを通して、全校職員間で話し合い学び合いながら授業づくりが行えるよう、授業改善や情報共有できる日を年間計画に位置付ける。 ・各学習グループで大切にしてきた「児童生徒の様子（や変容）」や「授業づくり（改善）」等についての学び合いを他グループとも直接的に共有できる場を設定する。 3・外部専門家による授業支援等を計画的に行うとともに、担任が必要性的について主体的に判断できるように提案する。 4・コア・ティーチャーと連携し、teams を活用して教材や教具について共有する。	
達成度の判断・判定 基準あるいは指標	1 肢体不自由教育を行う学校の教職員としての基礎知識の定着、専門性の向上に効果的な研修の体制を整えることができたか。 2 児童生徒の願う姿を明らかにしたり、各部各重点を意識したりして授業づくりができるなど、それぞれが実践していることを持ち寄って交流する時間があり、それによってポジティブなコミュニケーションを増やし、「みんなの研修をみんなでつくる」雰囲気になるような「授業づくりの日」を設定することができたか。 3 専門家等との連携が教職員の授業づくりの悩みの解決につながるようなサポートができたか。 4 teams 等を通して、全校職員間で、遊具や教材・教具について共有することができたか。	
取組状況・実践内容等	1 全教職員の専門性の向上を目指し、各種専門家等及び校内の人材（各分掌、各コア等）を生かし、計画的に研修会を実施している。 2 PDCAサイクルに基づく授業改善を基本とする「授業づくりの日」を毎月1回設定し、学び合いを大切にする雰囲気のもと、教育目標や各部重点を意識し、学習グループの授業公開や授業記録などを通して、職員間で話し合い学び合いながら授業づくりや授業改善を行っている。 3 年間を通しての外部専門家による授業支援や必要に応じてセンターのリハビリ参観を実施している。 4 teams「教材・教具」を活用し、遊具や教材・教具について共有し合えるようにしている。	
評価の視点		評価
1 肢体不自由教育を行う学校の教職員としての基礎知識の定着、専門性の向上に効果的な研修の体制を整えることができたか。		A ☐ B ☐ C ☐ D ☐
2 学び合う雰囲気を大切にし、「児童生徒の様子や変容」や「授業改善」等について、授業公開や授業記録等をもとに各グループで話し合い、（各グループで学び合ったことを）全校で共有できるように、「授業づくりの日」の取組を計画的に推進することができたか。		A ☐ B ☐ C ☐ D ☐
3 専門家等との連携が教職員の授業づくりの悩みの解決につながるようなサポートができたか。		A ☐ B ☐ C ☐ D ☐
4 コア・ティーチャーと連携し、様々なニーズに合わせた活用しやすい教材・教具に関する情報を teams で効果的に発信・共有できたか。		A ☐ B ☐ C ☐ D ☐

成果・課題	総合評価
1 ○各分掌やコア・ティーチャーが研修計画にそって実施し、肢体不自由教育を行う学校の教師としての基礎知識の定着や専門性の向上など経験年数に応じた効果的な研修を実施できた。 ▲職員研修が多く、自主的な研修に取り組みにくい状況にある。各自で動画視聴を活用するなど、研修方法を見直したり、職員の要望をもとにした研修会を計画したりするなど、研修体制を改善する必要がある。 2 ○年度初めに、授業公開や授業記録を通しての学び合い等、授業改善の方法や視点を明らかにし、どのように学び合い高め合っていくのかを具体的に提示して、各学習グループで学び合いたいことを共有し、年間計画をもとに「授業づくりの日」に主体的に取り組むことができるようにした。 ○授業公開（授業記録も含む）をもとにした学び合いを通して、様々な捉え方や考え方に気付き、自分なりに考えて試行錯誤したことを、互いに発信し合うことで、全教職員で根拠のある授業を築いていくことにつながるよう推進した。 ▲「授業づくりの日」で定着した「学び合いを大切にする雰囲気のもと、教育目標や各部重点を意識し、学習グループの授業公開や授業記録等を通して、職員間で話し合い学び合いながら授業づくりや授業改善を行うこと」をもとに、全教職員がより連携・共同することで充実した教育活動を展開できるような研修の工夫及び実践的な取組について再考する必要がある。 3 ○困っていることやニーズに応じて必要な支援や指導助言を受けられるよう、外部専門家との連絡調整を図り、教職員の学びや研修の場を計画的に設けることができた。 ▲研修や助言を受ける機会が複数回に渡っており、教職員が主体的に授業支援を受けられるように、研修内容や体制を見直す必要がある。 4 ○昨年度に引き続き、teams を通して、児童生徒の成長や発達を促す様々な知恵やスキル、支援機器や補助具の活用方法などを投稿したり、活用したりできるようにした。 ▲コア・ティーチャーと連携したり、管理職や事務部に相談したりして、遊具や教材、教具に関しての修繕や破棄などの対応や安全管理に努める必要がある。	A B C D
来年度に向けての改善方策案	1 ・肢体不自由教育を行う学校の教職員としての専門性の向上、定着を一人一人が意識して実践が行えるよう、各分掌やコア・ティーチャー等と連携を図りながら、研修会を計画・実施する。 ・教職員が「やりたい」「学びたい」と主体的に参加できる研修の工夫をする。 2 ・これまでの取組や次年度に向けた引き継ぎなどをもとに、教育目標「根拠のある授業づくり」について、より実践的な取組が主体的にできるように学び合いや授業改善できる日を年間計画に位置付けていく。 3 ・教職員が主体的に授業支援を受けられるように、研修内容や体制を見直す必要がある。 4 ・校内にある教材や教具、遊具などの安全管理だけではなく、修繕や破棄についての提案をしたり、使用目的や使い方などについても全職員で共有したりできるように、管理職や事務部、コア・ティーチャーや自立活動領域主任と連携を図りながら推進していく。

学校関係者評価（令和6年2月5日実施）

意見・要望・評価等 ・教職員は多忙なうえに、専門性向上のために多くの研修を実施している。 ・教職員が自ら主体的に参加できるよう、研修を工夫することはよい。

【保健安全部】

評価する領域・分野	保健安全部 「保健管理」「安全管理」 ～安全・安心な学校づくり～
現状及びアンケートの結果分析等	・児童生徒の健康状態の変化を早めに把握したり、長期入院や困難な事例に適切に対応したりすることができるように健康管理に努める。 ・全校児童生徒の健康管理のため、保護者やセンターとの連携を密に行う必要がある。 ・医療的ケア児の校外学習を安全に実施できるように、きめ細かい計画を立てる必要がある。 ・感染症への対応のため、衛生的な校内環境を維持し続ける必要がある。 ・校内及び校外でのプール活動を、安全に取り組むことができるような体制を整える。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 保護者や希望が丘こども医療福祉センター、その他外部医療機関と連携した健康管理、医療的ケアを実施する。医療的ケア児の校内での学習活動や、校外学習及び宿泊学習の計画立案において、担任と看護師が十分に連携を取る。 2 職員自身の衛生意識の維持及び衛生的な校内環境の維持を呼び掛ける。 3 プール活動研修会への積極的な参加を呼び掛け、安心安全で充実したプール活動につなげる。
重点目標を達成するための校内組織体制	1 保護者やセンターとの引継ぎによる健康状態の把握と情報交換、養護教諭・教員・看護師による健康状態の把握と情報共有、緊急対応研修会・訓練、医療的ケア検討委員会、医療的ケア連絡会、指導医巡回指導、ケース会議、主治医訪問、実施検討会 2 使用した教室やトイレの清掃（毎日）、職員作業（月1回）の計画、時期に応じた感染症対策の発信 3 プール活動研修会、救急救命講習会、連絡帳やプールカードを通した健康状態の把握
目標の達成に必要な具体的な取組	1 ・養護教諭の教室巡回や健康観察表を活用し、児童生徒の健康状態を把握し、体調の変化に早めに対応できるようにする。 ・緊急対応研修会や実技指導研修会等を利用し、医療的ケア対象児童生徒の健康状態や医療的ケア内容について教職員が理解できるようにする。 ・健康状態に課題が生じた場合に、主治医や学校医、指導医に相談して対応できるようにする。 ・校外学習の計画段階から看護師が加わり、安心安全な実施につなげる。実施検討会で指導医を交えて十分に検討を行う。 2 ・清掃活動に必要な道具や物品等の点検及び補充を行う。 ・効果的な清掃方法を全校職員に提示し、衛生的な環境の維持を呼び掛ける。 ・国や県からの情報をもとに、当校の感染症対策を検討し周知する。 3 ・プール活動実施要項に基づき、実施手順や配慮事項について共通理解を図り、安全安心に推進できるようにする。 ・プール活動研修会を実施し入水の手順や配慮事項についての理解を図る。 ・入水時に医療的な配慮を必要とする児童生徒について、主治医や学校医、指導医に相談しながら安全に入水できるようにする。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 医療的ケア児の校内での学習活動や、校外学習の計画立案において、担任と看護師が十分に連携をとり、安全に実施されたか。 2 校内が衛生的に維持されたか。 3 プール活動が安全に実施されたか。
取組状況・実践内容等	1 提出された医ケア児該当クラスの週予定をもとに、医療的ケアが必要な場面やタイミングについて担任と看護師が事前に打ち合わせ、当日の医

	療的ケアを実施した。 注入方法について保護者と相談して見直しを行った。坐薬挿入の研修と同時にブコラム練習キットを用いて使用の留意点を周知した。 校外学習における必要書類の記入方法や提出時期を事前に担任に説明して期日までの提出を促し、安心安全な校外学習や宿泊学習が実施可能かを実施検討会で検討した。 2 職員作業実施日を中旬に設定し、計画的に校内全体の清掃を行った。清掃道具の破損や補充は管理担当者からその都度連絡を受けて補充した。 3 プール活動開始前に、福祉友愛プールで新転任者と希望者対象の研修を行った。
評価の視点	評価
1 綿密な健康観察と的確な医療的ケアの実施ができたか。	A ☒ B C D
2 校内を衛生的に維持し、児童生徒の学習環境を整えることができたか。	A ☒ B C D
3 安全にプール活動の実施ができたか。	A ☒ B C D
成果・課題	総合評価
1 ○事前に学級での活動内容を知ること、授業や学校行事に向けて計画的に看護師の配置をすることができた。今後も週予定の提出を依頼する。 ○校外学習では、事前の打ち合わせを密に行い、校外でも安全に医療的ケアを行うことができた。来年度も計画段階から教員と詳細な打ち合わせを行い、充実した事前計画を立案したい。また、蓄積したデータを効率的に利用した書類の作成方法や作成スケジュールを提案したい。 2 ○毎日の各教室の清掃や毎月の職員作業を通して校内の様々な場所の清掃を行ったため、衛生状態を維持することができた。 3 ○友愛プール、ジャグジープールとも大きなトラブルがなく、安全に利用することができた。 ▲プール活動参加同意書の提出でトラブルがあったため、個人情報に関わる書類の取り扱い方法を見直す必要がある。	A ☒ B C D
来年度に向けての改善方策案	1 医療的ケア児の校内での学習活動や、校外学習及び宿泊学習の計画立案において、担任と看護師が十分に連携を取る。 2 職員自身の衛生意識の維持及び衛生的な校内環境の維持を呼び掛ける。 3 ヒヤリハット事例の提出を定期的に呼び掛ける。

学校関係者評価 (令和6年2月5日実施)

意見・要望・評価等
・小学校ではプール活動が減ってきている。学校では、実体験を通して、生きていくうえで大切なことを教えてほしい。 ・ヒヤリハット事例を報告することで、ヒヤリハットの再発やアクシデントを防止するための分析をすることができる。

【防災・環境部】

評価する領域・分野	防災・環境部 「防災・防犯等非常時への対応」 「校内安全」
現状及びアンケートの結果分析等	・防災教育の充実のために必要な資料を充実させる。 ・不審者侵入時の対応、連携を明確化する。 ・随時、危機管理体制の見直しを検討する。 ・福祉避難所の運営方法について、岐阜市と連携を図る。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 防災教育の充実に向け、授業で利用できる資料の作成を行う。 2 不審者侵入時の訓練を行い、対応や連携法を確認し実践できるようにする。

	3 福祉避難所の開設に向けて、運営方法を岐阜市と協議する。
重点目標を達成するための校内組織体制	1 防災対策委員会、防災職員研修、命を守る訓練（火災、水害、引き渡し） 2 防災対策委員会、職員防犯研修 3 防災対策委員会
目標の達成に必要な具体的取組	1 当校の児童生徒の実情を踏まえ、災害時に必要な知識や行動について、訓練を通して検討し、研修や専門家の意見を参考にしながら、防災教育に活用できる資料を作成する。 2 不審者侵入時の役割分担を明確にし、児童生徒や職員の安全を最優先に行動できるよう訓練を行い、実践できるようにする。 3 福祉避難所開設時の学校と岐阜市の役割を明確にする。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 児童生徒の実態に則した、防災教育の内容を検討することができたか。 2 全職員が不審者侵入時の対応が分かり、行動できるか。 3 福祉避難所開設における当校の役割について、岐阜市と確認できたか。
取組状況・実践内容等	1 外部講師を招いて、防災の授業を行うことができた。体験的に行うことで、児童生徒は興味・関心をもつことができとても参考になった。 2 ランチルームに不審者が侵入した想定で訓練を行った。避難経路の確保から不審者への対応を行い、警察関係者と確認をしながら、訓練を行うことができた。 3 岐阜市と福祉避難所開設・運営の訓練を行った。開設・運営にあたっての課題や改善点を提案した。
評価の視点	
1 防災教育に必要な参考資料を作成できたか。 2 ランチルームでの不審者侵入についての対応を確認することができたか。 3 福祉避難所開設までの流れや運営時の当校の役割について、訓練を通して確認できたか。	A ☒ B ☐ C ☐ D ☐ A ☐ B ☐ C ☐ D ☐ A ☒ B ☐ C ☐ D ☐
成果・課題	
1 ○外部講師の講義や資料を参考にすることができた。 ▲当校児童生徒の実態から体験的な授業が適しているため、災害時の対応を実践的に行う授業（訓練）が必要。 2 ○不審者侵入時の対応を訓練で確認することができ、警察署の指導も受けることができた。 ▲実際に児童生徒が在校中に対応できるか確認が必要。 3 ○岐阜市と福祉避難所開設・運営の訓練を実施し、岐阜市に対して当校の実情を踏まえた運営に関する提案をすることができた。 ▲岐阜市との協議がまだ不十分のため、実際に災害が起きたときに、運営を行うことができるのか不安が残る。	A ☒ B ☐ C ☐ D ☐
来年度に向けての改善方策案	1 児童生徒が在学中の不審者対応訓練の実施。 2 地震発生後の学校待機時に必要な物品の準備、体制の構築。

学校関係者評価（令和6年2月5日実施）

意見・要望・評価等
・地震が起きたときに、自分の身は自分で守ること、地域で何ができるのかを考えてほしい。
・地域と学校が横につながって、防災訓練等、一緒に取り組めるとよい。
・家庭でも役立てられるような避難時の情報が得られるとよい。

【生活支援部】

評価する領域・分野	生活支援部 「人権教育推進（MS・MSJ リーダーズ）」 「希望フェスタ（児童会・生徒会活動）」「スクールバス運行」	
現状及びアンケートの結果分析等	・人間関係の中で互いの誤解や思い込み、行き違いが起きたときに、児童生徒自身が、あるいは児童生徒同士で問題を解決していく力をどのように育てていくのが課題である。 ・感染症予防対策をしながら、希望フェスタを、学校全体あるいは保護者や地域に開かれた行事として開催し、児童生徒の活躍の場を広げること検討する。 ・スクールバスにおける関係機関や管理校、保護者との連絡や情報共有、運営の進め方に課題が残っている。	
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 職員・児童生徒の人権意識を高める研修や活動等を計画、実施する。 2 児童会・生徒会が主体となって、希望フェスタの企画を考え実施する。 3 スクールバスの安全で円滑な運行に努める。	
重点目標を達成するための校内組織体制	1 人権感覚チェックリスト、あいさつ運動・あったかい言葉掛け運動、いじめ防止等対策検討会議 2 児童会・生徒会、希望フェスタ 3 乗務員研修、両校スクールバス担当者会、スクールバス保護者説明会	
目標の達成に必要な具体的取組	1 職員の人権感覚を高められる研修や取組等を行う。 MS・MSJ リーダーズが中心となり、あいさつ運動・あったかい言葉掛け運動を実施する。 2 希望フェスタに向けて、計画的に児童会・生徒会活動を進める。 コロナ禍において安全かつ盛大に実施するための組織体制・運営を行う。 3 担任や保護者にスクールバスの利用について周知する。 管理校や関係機関との役割や文書を整理し、明確化する。	
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 職員・児童生徒同士の人権意識を高めることができたか。 2 児童会・生徒会活動が適切に運営されていたか。 安全に開かれた行事として希望フェスタを開催できたか。 3 関係機関や保護者と連携を図り、スクールバスの安全運行ができたか。	
取組状況・実践内容等	1 ・今年度から改編した「教師のための人権感覚チェックリスト」を実施した。 ・定期的に人権にかかわるアンケートを実施したり、生徒の悩みを聴き取ったりして、スクールカウンセラーへの相談につなげた。 2 ・生徒会と MS・MSJ リーダーズを分けて運営した。 ・希望フェスタでは、児童会・生徒会の企画を取り上げて実施した。また、安心・安全に配慮しながら発表を鑑賞できる対象の保護者を広げた。 3 ・保護者対象の次年度の利用説明会や利用希望調査を夏休み前に実施した。 ・緊急事態が起きたときや保護者から乗車変更連絡があったときに、迅速に関係機関と情報を共有しながら運行した。	
評価の視点		評価
1 人権教育推進計画に基づいた会議や研修会、人権にかかわるアンケートの実施を通して、スクールカウンセラーの活用ができたか。		A ☐ B ☐ C ☐ D ☐
2 感染症予防対策や実態に応じた児童会・生徒会や希望フェスタの運営ができたか。		A ☐ B ☐ C ☐ D ☐
3 関係機関との円滑な連携を図り、スクールバスの安全な運行につなげられたか。		A ☐ B ☐ C ☐ D ☐

成果・課題	総合評価
1 ○定期的に実施した人権に関わるアンケートの結果や留意事項を職員に周知したり、SOS の出し方に関する教育や SOS の受け止め方についての人権研修会を実施したりして、職員や児童生徒の人権について考える機会につなげた。 ○緊急対応が必要な生徒の相談に対応するため、スクールカウンセラーの助言を受けながら危機管理フロー図を作成し、職員に周知した。 ▲いじめの定義や対応、スクールカウンセラーの活用、SOS の出し方に関する教育など人権に関わる事項について職員に周知徹底する必要がある。 ▲利用を希望した生徒や保護者、教員ができるだけ多くスクールカウンセラーへ相談できるような枠組みを設定する必要がある。 2 ○MS・MSJ リーダーズと生徒会を別々に運営したため、生徒も職員もそれぞれの活動に集中して取り組むことができた。 ○児童会・生徒会が主体となって企画した案を取り上げて実施することができた。 ○感染症予防や防犯対策に気を付けて、昨年度よりも多くの保護者が児童生徒の発表する姿を鑑賞することができた。 ▲全校児童生徒が参加できる企画の立案や、発表日時の工夫など全校が一体となって参加できるような形で、希望フェスタやあったかい言葉掛け・あったかい態度運動を実施する必要がある。また、希望フェスタについては、安全・安心に配慮しながら鑑賞できる対象を広げられるとよい。 3 ○運転士や添乗員の交代など不測の事態が生じたが、関係機関と連携して安全に運行することができた。保護者を対象とした次年度の利用説明会や利用希望調査を夏休み前に実施したことで、利用人数やバス停の調整を円滑に行えた。 ▲乗車変更等について、職員間や保護者との間で連絡・確認漏れがないようにする必要がある。 ▲添乗業務やバス当番などバス業務に関わる職員の負担を軽減したり、補填したりするような体制の構築を試みる必要がある。	A <u>B</u> C D
来年度に向けての改善方策案	1 ・全職員に対して、人権にかかわって意識していく事項を定期的に確認して周知する。 ・児童生徒の悩みや困りごとを早期に発見して支援するために、スクールカウンセラーの活用や職員間の連絡体制を整え、周知する。 2 ・安全・安心に配慮しながら、より学校一体となった希望フェスタの開催ができるような企画・運営を行う。 3 ・管理校として安全・安心な運行ができるように、関係機関や保護者への連絡、職員体制の調整を丁寧に行う。

学校関係者評価（令和6年2月5日実施）

意見・要望・評価等 ・教職員が人権意識を高めることは大切である。 ・希望フェスタに学校運営協議会の委員も参観して、児童生徒の活躍の場を見せてもらいたい。
--

【総合支援部】

評価する領域・分野	総合支援部 「センター的機能の充実事業」「進路支援」
現状及びアンケートの結果分析等	・個別の教育支援計画や個別懇談の記録等から、本人・保護者のニーズや支援方法を明確にし、担当者から担任へ積極的に働き掛ける。 ・担任のニーズを把握し、内容に応じてケース会議等を行い、支援につなげる。 ・肢体に障がいや有する園児、児童生徒の在籍状況を把握し、センター的機能

	能や相談窓口について周知し、必要に応じて支援につなげる。 ・小・中学部段階からの進路支援の取組や情報提供の仕方を工夫することで、保護者のニーズを的確にとらえてサポートする。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 ニーズを明確にし、支援が充実するような支援体制の構築 2 センターの機能についての理解・啓発活動と相談支援方法の工夫 3 キャリア教育の目的と取組、系統性についての理解・啓発活動
重点目標を達成するための校内組織体制	1 校内コーディネーター（総合支援部の教員）を各部や学習グループの軸とした管理職や担任、関係機関との連携 2 当校のコア・ティーチャーや岐阜市教育支援委員、各教育事務所・学校・施設、外部研修会や会議等の出席者との連携 3 総合支援部メンバー、担任や保護者との連携
目標の達成に必要な具体的な取組	1 ・校内コーディネーターが中心となり、進路を含めた、本人・保護者のニーズ、担任のニーズを把握し、分掌会で情報共有、支援方法を検討する。それを基に担当者から担任へ積極的に働き掛け、支援につなげる。 2 ・総合支援部のリーフレットを作成する。 ・各教育事務所を通じて、肢体に障がいをもつ児童生徒が在籍する園・学校にリーフレットや研修の案内等を配付し、当校のセンター的機能や相談窓口についての理解・啓発を図る。 ・岐阜市や各務原市在住の肢体に障がいをもつ園児・児童生徒の現状を把握し、定期的に電話等で連絡を取ることで相談や啓発活動を行う。 3 ・「キャリア教育だより」の発行や掲示物等で情報発信することで、保護者や職員に各部のキャリア教育の取組や目的について理解を促し、進路について意識付けをする。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 進路を含めた、本人・保護者のニーズや担任のニーズを把握し、必要に応じて支援につなげることができたか。 2 リーフレットや研修の案内等の配布により、関係機関に対して当校のセンター的機能や相談窓口について啓発を図ることができたか。 3 保護者や職員に各部のキャリア教育の取組や目的について理解を促し、進路について意識付けをすることができたか。
取組状況・実践内容等	1 ・本人・保護者からのニーズをリストアップし、分掌会で支援方法を検討した。 ・『個別の教育支援計画』の県統一様式への移行にあたり、記入例の作成や注意事項等をまとめるなど準備を行った。 2 ・当校のセンター的機能の相談窓口の名称を「肢体不自由児のための相談支援センター」とし、新たにリーフレットを作成した。 ・各教育事務所を通じて、肢体不自由のある児童生徒が在籍する学校に公開講座の案内や『先輩と語る会』の案内を配布した。 ・外部相談の相談方法（手続き、相談用紙の記入・提出等）を簡略化した。 3 ・年6回「キャリア教育だより」を発行したり、掲示板にて、研修案内や事業所等に関する情報を紹介したりした。
評価の視点	
1 進路を含めた、本人・保護者のニーズや担任のニーズを把握し、必要に応じて支援につなげることができたか。	A ☒ B C D
2 リーフレットや研修の案内等の配布により、関係機関に対して当校のセンター的機能や相談窓口について啓発を図ることができたか。	☒ A B C D
3 保護者や職員に各部のキャリア教育の取組や目的について理解を促し、進路について意識付けをすることができたか。	A ☒ B C D

成果・課題	総合評価
1 ○教育支援計画や個別懇談の記録、管理職や担任からの情報提供により、進路を含めた本人・保護者のニーズを把握し、必要に応じて支援につなげることができた。 ▲本人・保護者のニーズや困っていることについて、管理職からの情報提供が主となっており、校内コーディネーターの役割や校内支援体制について、職員に十分周知できていない。 2 ○新たに作成したリーフレットを県内の小・中学校や肢体不自由のある生徒が在籍している県立高等学校、市内の幼稚園・保育園に配布（170部）したり、5つの関係諸機関に設置を依頼したりするなど、当校のセンター的機能や相談窓口について啓発を図った。 ○公開講座や『先輩と語る会』に県内の肢体不自由のある生徒やその保護者、担任等の参加があり、肢体不自由に関する理解を深めたり、進路に関する情報等を発信・共有したりすることができた。 ○外部相談の受付方法について、相談者による相談用紙の記入・提出から、電話による受付に変更し、相談しやすい環境を整えた。 3 ○『キャリア教育だより』を定期的に発行し、各部のキャリア教育の取組を紹介するだけでなく、卒業後の進路について早期から関心をもってもらえるよう、就業体験を行った高等部の生徒や保護者の声を掲載した。 ▲「進路＝卒業後」「進路指導とキャリア教育は別物」というイメージがあり、職員・保護者のキャリア教育についての理解がまだまだ十分ではない。	A B C D
来年度に向けての改善方策案	1 ニーズを明確にし、支援が充実するような支援体制の構築 ・校内コーディネーターの周知と管理職・担任と連携することで、児童生徒や保護者、担任のニーズを把握し、具体的な支援につなげる。 2 センター的機能についての理解・啓発活動と関係諸機関との連携 ・岐阜市教育委員会等と連携し、肢体不自由のある園児・児童生徒の現状把握を行う。また、関係機関にセンター的機能や相談窓口について案内することで、必要に応じて支援につなげる。 3 キャリア教育についての理解・啓発 ・研修等を通じて、職員のキャリア教育への理解を深める。 ・保護者に対しての情報発信の時期や方法を工夫する。

学校関係者評価（令和6年2月5日実施）

意見・要望・評価等 ・高等部卒業後の進路については、キャリア・パスポート等のツールを使って進めることはよい。卒業後、就労したもの、3年後には人間関係で辞めるケースもある。先を見据えて進路先と連携してほしい。 ・新たに作成したリーフレットがセンター的機能についての理解や啓発につながり、必要な支援ができるとよい。

【渉外・広報部】

評価する領域・分野	渉外・広報部 「保護者、地域との連携」「文化活動の推進」
現状及びアンケートの結果分析等	・感染症の状況を踏まえながら、実施時期や内容について再検討かつ柔軟に対応する。 ・校外作品展への参加の呼びかけ、校内作品展を計画的に実施する。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 保護者がPTA活動を主体的に進めていけるよう支援し、活動についての情報発信と共有を図る。ホームページ等を活用する。 2 積極的な校外作品展への参加を呼び掛けるとともに、校内作品展の充実

	を図り、情報発信をする。校内掲示やホームページ等を活用する。
重点目標を達成するための校内組織体制	1 執行部や各委員会を支援する渉外・広報部職員間の情報共有と協力体制。 また、PTA行事や会議を進める上で必要な管理職や他職員との連携。 2 渉外・広報部担当職員と学級担任との情報共有と協力体制。
目標の達成に必要な具体的取組	1 PTA活動に関する会議や相談、準備などを保護者と連携して進め、主に文書作成や連絡調整の面で支援する。また、情報等をホームページで情報発信する。 2 校外作品展への参加について、積極的に呼び掛けを行うとともに、校内作品展の充実を図り、ホームページで情報発信する。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	1 保護者がPTA活動を主体的に進めていけるよう支援し、情報発信できたか。 2 校外作品展への参加を積極的に呼び掛け、計画的に実施し、情報発信できたか。
取組状況・実践内容等	・執行部役員・各委員会の長と連携し、PTA年間行事・活動を計画・実施することができた。 ・コロナ禍の間の活動制限や保護者の意識変化があり、PTA会員が集まる例会は実施せず、PTA会報（キキ・ボウ通信）で活動を伝えた。 ・次年度の役員選出方法として、執行役員から推薦する方法をとり、執行委員を決めたが、委員会の役員選出において難航した。 ・4月初めに各委員会の構成メンバーについて保護者の希望を取ったが、委員会活動のスタートが遅れたり混乱が生じたりした。 ・校外・校内の作品展に計画的に実施でき、様々な作品展に出展することができた。また、受賞者のデータ化を行った。
評価の視点	評価
1 保護者がPTA活動を主体的に進めていけるよう支援できたか。	☒ A B C D
2 校外の作品展に出展する機会を設け、児童生徒の作品を情報発信できたか。	☒ A B C D
成果・課題	総合評価
1 ○PTA執行部との連絡は部長が行い、各委員会活動は担当者を介在して活動を実施した。 ○コロナ禍でのPTA活動の縮小により、活動の引継ぎや計画・実施が困難な状況があったが、無理なく活動することができた。 ○PTA活動として、会員同士の交流（学年を超えた縦の関係を作ること）をねらい「ワークショップ フラワーアレンジメント」を行い、互いの顔を知る機会がもてた。 ○例会の代わりにPTA便り「キキ・ボウ通信」を発行し、PTA活動を知らせた。今年度は執行部で行ったが、来年度は広報部で行う。 ▲3つの常任委員会については、役員の選出が困難になってきている。令和7年度に向けて役員や組織の見直しを行い提案する。（規約改正を伴う） ▲年度初めにスムーズに委員会活動が行えるように、各委員会の構成メンバーは、前年度で決定する。 ▲会報については、個人情報の関係で写真を掲載することが困難になってきている状況があり、年度初めの1回の発行とする。 ▲交流委員会は、PTA会員の交流を目的にした研修の場を計画し実施する。 ▲「先輩保護者と語る会」の名称を、高等部行事の「先輩と語る会」と区別しやすくするため、「OB・OG保護者と語る会」に変更し実施する。	☒ A B C D
2 ○文化活動は全員で分担し行うことにより、業務の効率化を図った。 ○各作品展の受賞者の記録をデータ化（一覧及び個人）し、要録記入の記録データと統一することができた。また、他の受賞（漢検、英検等）についても担当者が入力する形でデータ化した。	

○校外の新規の作品展に計画的に出展することができた。 ○校外の作品展に出展した作品の返却が着払いのため、事務（事務長）が立替をしていただく関係で、返却日時がわかるように一覧にした。 ▲作品展の出展がネット化され、入力作業が煩雑で困難になってきている。担当者の負担軽減を図る。また、募集要項が学校のＣメールに入るので、こまめにチェックする必要がある。	
来年度に向けての改善方策案	１ コロナ禍以前に実施してきた活動を精査し、保護者が必要とする活動を無理のない範囲で実施できるように支援する。 ２ 役員選出が困難になってきていることから、執行部と連携し、委員会活動・組織の見直しや活動内容を検討し、提案できるように支援する。 ３ 作品展の出展、搬入、搬出などの負担の軽減を図る。

学校関係者評価 （令和6年2月5日実施）

意見・要望・評価等 ・ＰＴＡ会報（キキ・ボウ通信）を発行して、ＰＴＡ活動の様子を伝えることはよい。 ・無理なくＰＴＡ活動を実施できるよう、改変していけるとよい。
--

【小学部】

評価する領域・分野	「小学部」
現状及びアンケートの結果分析等	・教科担任制による教科学習で、専門性を活かした授業運営ができ担任の負担を軽減するとともに、児童の気持ちの切り替えにつながった。引き続き教科担任制を取り入れ、教科等授業の充実を図る。また、集団授業を適切に実施できるよう、集団作りや児童の実態に合わせた工夫を行う。 ・部会の時間内でミニ研修などを行い教育課程についての研修や授業交流を行うことができたが、実際に授業を見合うことや研究授業を設定することがほぼできなかった。授業交流できる時間を設定し、経年研修で作成した指導案やグループからの発信による授業提案をもとに、授業研究会ができるようにする。 ・保護者と日々の引継ぎを丁寧に行い連携を図ることはできたが、目標や授業内容の設定については保護者の思いとずれが生じたことがあった。そのため、保護者と連携して学校生活が送れるようにするために、担任が中心となり日々の様子を丁寧に引継ぎ、また一緒に育ちを支えられるように目標を相談、共有し、手立て等を定期的に確認する必要がある。 ・行事等で児童が生き生きと活動し成長を感じられる場面が多いことを改めて実感したため、今後も続くと思われる感染対策は徹底して行い、行事等ができる限り実施できるよう工夫する。保護者とともに活動できるような内容（スポーツフェスタのようなもの）も検討していく。 ・部内の情報を細やかに整理し伝え合うことで全校に発信できることもあり、部内だけでなく全校体制で協力して運営することで、安全安心につなげることができた。引き続き部内の連絡、協力、対応体制を整え、あたたかい言葉を掛け合いながら、風通しの良い部運営ができるようにする。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	１ 一人一人の状況や見通しに合わせ適切に学べる教育課程づくり ２ 児童の目標や６年間の積み重ねを大切にする授業づくり ３ 目標を明確にした、保護者や関係者との相談、連携、引継ぎ
重点目標を達成するための校内組織体制	１ 学年会、類型、チーフ会、部会等 ２ 学年会、活動グループ、部会等 ３ 保護者、担任、部主事等

目標の達成に必要な 具体的取組	1 一人一人の状況や見通しに合わせ適切に学べる教育課程づくり ・児童の状況や変化について把握し情報共有する。 ・教育課程と授業内容の確認をし、改善する必要があるものはチーフ会を通して情報交流し提案していく。 2 児童の目標や6年間の積み重ねを大切にする授業づくり ・児童の目標を具体的にし、手立てや評価を丁寧に検討する。 ・6年間の見通しがもてる年間計画を作成することや、授業ごとの担当者を決め実践することを大切にし、内容の確認や記録を丁寧に行い授業実践する。 ・部会でのミニ研修、部内の授業研究会を定期的に行い、授業づくりの日を中心に研修できる環境を作り実践につなげる。 3 目標を明確にした、保護者や関係者との相談、連携、引継ぎ ・懇談での目標の確認について、保護者とよく相談し、日頃から確認したり修正したりしながら、関係者とも連携をとり、児童の育ちを一緒に支えられるようにする。 ・保護者との連絡や引継ぎについては、関係職員で情報共有できるようにする。
達成度の判断・判定 基準あるいは指標	1 一人一人の状況や見通しに合わせ適切に学べる教育課程づくりができたか。 2 児童の目標や6年間の積み重ねを大切にする授業づくりができたか。 3 目標を明確にした、保護者や関係者との相談、連携、引継ぎができたか。
取組状況・実践内容等	1 ・授業参観を通して、他類型や他学級の状況を確認することで、教育課程について情報交流する機会を設けた。 ・学習グループ、チーフ会、部会を行い、教育課程や学習内容について検討した。 2 ・経年研修として指導案を作成し研究授業を行い、4回の授業公開をした。 ・授業づくりの日に、児童の様子や授業内容を定期的に検討しながら、コア・ティチャーや外部専門家に助言を受けて実践した。 3 ・登下校時の引継、連絡帳のやりとり、授業参観、懇談等を通して、保護者と情報交換や情報共有を行った。 ・日々の記録から児童の実態を確認し、保護者や関係機関と連携を図った。
評価の視点	評 価
1 一人一人の状況や見通しに合わせ適切に学べる教育課程づくりができたか。 2 児童の目標や6年間の積み重ねを大切にする授業づくりができたか。 3 目標を明確にした、保護者や関係者との相談、連携、引継ぎができたか。	A ☐ B ☐ C ☐ D ☐ A ☐ B ☐ C ☐ D ☐ A ☐ B ☐ C ☐ D ☐
成果・課題	総合評価
1 ○授業参観を行い教育課程の内容について理解を深め、教育課程の見直しや類型変更の検討に活かした。 ▲児童の実態把握を行い、グループ内での実態差が大きい場合は、学習の場の工夫や類型変更、教育課程についての検討を定期的、継続的に行う必要がある。 2 ○授業づくりの日や放課後の時間を活用し、学習グループ内で目標や手立て、教材等の授業計画についての相談や検討ができた。 ○校内のコア・ティチャーや外部専門家の助言を受け、実践につなげ指導にあたることができた。 ▲授業づくりを行う上で、活動や課題別の6年間の見通しが分かるものがあるとよい。 ▲コア・ティチャーや外部専門家の助言を受けるにあたり、目標や指導の手立ての見直しもできるようにしていきたい。 3 ○日常的に保護者と情報交換や情報共有を丁寧に行うことができた。 ▲児童の実態や家庭の状況を把握し、迅速に面談やケース会議等を行い、関係機関と連携を図りながら進めていきたい。	A ☐ B ☐ C ☐ D ☐

来年度に向けての改善方策案	・教科担任制による教科学習を継続し、教科等授業の充実を図る。また、必要に応じて集団授業を実施できるよう、集団作りや児童の実態に合わせた工夫を行う。 ・経年研修で作成した指導案や学習グループからの発信による授業提案をもとに、授業交流できる機会を設定し、授業研究ができるようにする。 ・目標の評価や見直し、6年間の見通しをもった授業計画を立て、実践し、改善をする。 ・保護者と連携して学校生活が送れるようにするために、担任が中心となり日々の様子を丁寧に引継ぎ、また一緒に児童を支えられるように目標を相談、共有し、手立てなどを定期的に確認する。 ・感染症対策を講じながら、行事や学習活動が実施できるように工夫する。 ・引き続き部内の連絡、協力、対応体制を整え、互いにあたたかい言葉を掛け合いながら、風通しのよい部運営ができるようにする。
---------------	--

学校関係者評価（令和6年2月5日実施）

意見・要望・評価等

・新型コロナウイルス感染症が5類に移行されたので、それを踏まえて、学校行事を進めてほしい。
 ・今は、放課後等デイサービスを利用している保護者が多いので、交流が希薄になっている。保護者と教職員が直接、顔を合わせて話せる機会が多くあるとよい。

【中学部】

評価する領域・分野	「中学部」
現状及びアンケートの結果分析等	・令和2～3年度の保護者による学校評価アンケートで明らかとなった課題を踏まえ、令和4年度は、次の点について重点的に取り組んだ。 ①生徒に付けたい力を明確にし、教師間で共有しながら授業づくりに取り組むとともに、授業の様子を積極的に発信する。 ②生徒の将来を見据え、必要な支援の在り方を探り、保護者や関係諸機関と連携して支援を行う。 ③生徒が健康で安全に生活するため、保健室、センター等との連携と教員間の情報共有を確実に行う。 ・上記の3点に関連する項目については、令和4年度の中学部保護者による学校評価アンケートでは、概ね高評価を得た。 ・上記の3点については、引き続き取り組むことで、現状維持につながると考えられるため、令和5年度も運営方針の重点とする。 ・令和4年度の中学部保護者アンケートで「あてはまらない」「わからない」等の回答比率が高かった項目は、以下の5点である。 【4 学校では、先生と児童生徒が信頼し合って活動している】 【11 学校の教職員は、礼儀正しく、親切で親しみがもてる】 【13 先生は、専門的知識が豊かで教師としての資質を身に付けている】 【17 保護者や地域社会の意見に対して、誠意ある対応をしている】 【21 積極的にICTを活用し、工夫した指導や支援を行っている】 ・上記の3点に、当校の教職員として必要な研修に努め、肢体不自由教育の専門性の向上と、教職員としての基礎基本的な部分について資質の向上を目指すことを、要素として加え、重点目標とする。
今年度の具体的な明確な重点目標	1 グループ会や授業づくりの日の取組を通して、生徒に付けたい力を明確にして、教職員間で共有しながら授業づくりに取り組むとともに、場に応じた集団構成での活動やICTの活用等、中学部に力を入れて取り組んでいる事柄のねらいや成果等を、外部に対して積極的に発信する。 2 生徒の将来を見据え、校内外の関係者から助言を得つつ、現状と課題や必要な支援の在り方を探るとともに、本人や保護者、関係諸機関の思いを丁寧に聞き取り、連携を図りながら支援を行う。 3 生徒が心身ともに健康で安全に生活するため、保護者や関係諸機関（センター含む）、保健室や教育相談担当等と連携を図るとともに、教職員間で確実に情報共有し、心身の変調を見逃さないようにする。

重点目標を達成するための校内組織体制	1 各グループ長を中心に定期的にグループ会や授業研究会を通して、教職員間で共通理解を図る。また、外部へ効果的に情報発信ができるように、ホームページや電子掲示板、部通信、各所属からの便り等、幅広く活用する。 2 校内における情報を提供するための進路指導主事、コーディネーター、コア・ティーチャー等と連携を図り、校外の専門家から助言等を受けやすくする体制や方途を整理する。 3 生徒が健康で安全に生活するための教職員間（保健室含む）、保護者、関係諸機関（センター含む）等とスムーズな連携を図り、支援に当たってのそれぞれの思いを丁寧に聞き取り、反映する。
目標の達成に必要な具体的取組	1 ○グループ会や授業づくりの日の取組を通して、生徒に付けたい力を明確にして、教職員間で共有しながら授業づくりに取り組むとともに、場に応じた集団構成での活動やICTの活用等、中学部にて力を入れて取り組んでいる事柄のねらいや成果等を、外部に対して積極的に発信する。 ・グループ内で生徒の実態、目標設定、支援方法、評価について話し合い、教師間で共有しながら授業づくりに取り組む。 ・異なるグループの生徒がともに活動する場を設定したり、教職員が互いの授業を見合って意見交換したりする。 ・授業の目標や支援、授業を通して成長した姿をホームページや電子掲示板、部通信、各所属からの便り等、場に応じて様々な方法で積極的に発信する。 2 ○生徒の将来を見据え、校内外の関係者から助言を得つつ、現状と課題や必要な支援の在り方を探るとともに、本人や保護者、関係諸機関の思いの丁寧な聞き取り等の連携を図りながら、支援を行う。 ・校内において、場に応じて、進路支援担当や特別支援教育コーディネーター、コア・ティーチャー等への相談・連携を行い、課題や評価基準の設定を行う。 ・校内で設定した課題や評価方法について、校外の専門家から助言等を受け、より精度の高いものとする。 3 ○生徒が心身ともに健康で安全に生活するため、保護者や関係諸機関（センター含む）、保健室や教育相談担当等と連携を図るとともに、教職員間で確実に情報共有し、心身の変調を見逃さないようにする。 ・日頃から生徒の様子をよく見、学級内だけでなく、様々な立場の教職員の視点で、生徒や保護者等の心身の変調に気を配る。また、変調を感じた場合は、速やかに周囲に相談するとともに、生徒や保護者に寄り添ってケアを行う。 ・年度当初の引継を確実にし、介助や環境面の危険について確認し、グループ内で共有する。 ・教職員のカウンセリングマインドの視点について、様々な研修の場において取り入れ、徹底する。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	※ 令和5年度の学校評価アンケートにて、関連項目の達成度を測る。各項目のポイントの維持・向上を目指す。 1 【13 専門的知識が豊かで教師としての資質を身に付けている】 【21 積極的にICTを活用し、工夫した指導や支援を行っている】 2 【8 進路に関する連絡や情報提供を生徒や保護者に向けて適切に行なっている】 【17 保護者や地域社会の意見に対して、誠意ある対応をしている】 3 【4 学校では、先生と児童生徒が信頼し合って活動している】 【10 個別の教育支援計画を保護者や関係諸機関と連携して作成し、将来を見通した支援をしている】 【11 教職員は、礼儀正しく、親切で親しみがもてる】 【16 医療機関との連携を図って生徒の健康管理に気を配っている】
取組状況・実践内容等	1 生徒に付けたい力を明確にし、教師間で共有しながら授業づくりに取り組むとともに、授業の様子を積極的に発信することができたか。 2 生徒の将来を見据えながら、必要な支援の在り方を探り、保護者や関係諸機関と連携して支援を行うことができたか。 3 生徒が健康で安全に生活するため、保健室、センター等と連携したり、教員間の情報共有を確実にしたりすることができたか。 ※ 中学部保護者の「令和5年9月学校評価アンケート」の上記対応項目における、「あてはまる」該当の回答ポイント数を昨年度と比較した。

評価の視点		評 価
1	【13 専門的知識が豊かで教師としての資質を身につけている】項目は、7.4ポイント向上した。 【21 積極的にICTを活用し、工夫した指導や支援を行っている】項目は、13.7ポイント低下した。	A ☒ B C D
2	【8 進路に関する連絡や情報提供を児童生徒や保護者に向けて適切に行なっている】項目は、14.4ポイント低下した。 【17 保護者や地域社会の意見に対して、誠意ある対応をしている】項目は、0.5ポイント向上した。	A B ☒ C D
3	【4 学校では、先生と児童生徒が信頼し合って活動している】項目は、6.8ポイント向上した。 【10 個別の教育支援計画を保護者や関係諸機関と連携して作成し、将来を見通した支援をしている。】項目は、0.5ポイント向上した。 【11 教職員は、礼儀正しく、親切で親しみがもてる】項目は、2.5ポイント向上した。 【16 医療機関との連携を図って生徒の健康管理に気を配っている】項目は、2.8ポイント低下した。	☒ A B C D
成果・課題		総合評価
1○授業力・専門性の向上を目指し、教職員同士が互いに研鑽を積み、成果を保護者に発信したことで、中学部の教育への理解を得られた。 ▲視線入力装置やデジタル教科書等、個と場に応じたICT機器や教材を活用しているが、保護者に認知されていない。 2○教職員の誠意ある対応について、保護者の理解が得られつつある。 ▲準ずる教育課程の生徒への積極的な進路情報発信を心掛けたが、十分ではなかったようである。重度重複障がいの子の生徒の保護者からは、高等部卒業後について知りたいとの声があった。 3○前年度「あてはまらない」「わからない」等の回答比率が高かった、教職員と生徒の関係や教職員の態度について高評価を得た。 ▲外部連携は概ね良好であるが、隣接の医療型障がい児入所施設との連携については多くの課題がある。感染症への対応や病弱教育に該当する生徒への支援等が不統一であり、教職員も憂慮した。		A ☒ B C D
来年度に向けての改善方策案	・教職員は引き続き専門性を高めるとともに、その成果を広く外部に発信する。特に、ICT活用については充分以上に成されている現状を伝える。 ・キャリア教育の一層の充実に向けて、中学部で一丸となって取り組む。重度重複障がいの生徒については、成人後の生活を見越した支援を心掛ける。準ずる教育課程の生徒については、心身に寄り添いつつ、より一層明確な情報を提供し、義務教育段階終了後の現実的な進路選択へとつなげる。 ・生徒や保護者の思いに寄り添って丁寧な支援を心掛けるとともに、必要なときに、すぐに教職員同士が相談し合うことができる体制を整える。 ・隣接の医療型障がい児入所施設管理職と当校管理職が連携し、情報をやり取りする。互いの管理職が互いの担当からの意見を十分に吸い上げる。 ・感染症対策や病弱教育的な支援について、学校としての方向性を管理職から教職員・保護者に示し、徹底する。また、新転任教職員については、対応マニュアルの場所ではなくそのものを示し、丁寧に伝達する。	

学校関係者評価（令和6年2月5日実施）

意見・要望・評価等
・子どもが小学部のときに、身体の内容を課題として取り組んできたのが、担任が変わったことで、急に摂食の内容に変更されていた。課題の継続について引継ぎをしてほしい。 ・担任に得意な専門分野があることは確かであるが、「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」に基づいて、何を中心に取り組むのか保護者と相談しながら進める必要がある。

【高等部】

評価する領域・分野	「高等部」
現状及びアンケートの結果分析等	・生徒の実態や支援方法など、教員間で情報共有をしながら、生徒がよりよく学校生活を送れるように教育活動の充実を図る。 ・引き続き感染症対策を行いながらも、行事や授業参観等を通して、学校での様子を伝えられるような工夫を行う。 ・進路については個々のニーズが違うため、丁寧に聞き取り、個々のニーズに即した進路情報の提供を行う必要がある。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	1 生徒が安心・安全に学校生活を送れるよう、個々の実態と課題の把握に努め、生徒一人一人の豊かな心を育むための支援を行う。 2 学びに向かう姿勢を高め、自己の意思を周りの人々に伝える力を育てるための支援を行う。 3 キャリア教育を通して自己の将来を考える機会をもち、自立や社会参加に向けた支援を行う。
重点目標を達成するための校内組織体制	1 主任やチーフを中心として、学年会や類型会を定期的に行い、教員間で積極的に情報共有を行う。 2 生徒の実態や課題に応じた効果的なグループ編成や指導体制を確立する。 3 互いの授業を見合い、意見を交換し合う環境を整え、教育力向上に努める。
目標の達成に必要な具体的取組	1 教員間で情報共有を密に行い、効果的な教育実践を行う。 ・引き続き新型コロナウイルス感染症対策を行いながら、教育的効果の得られる実践の工夫を行う。 ・生徒の実態や支援方法、安全面における引継ぎ事項を教員間で定期的に共有することにより、安全かつ効果的な教育を実践していく。 ・教員間で授業のねらいや実践内容、方法等について十分に検討、実践し振り返る。振り返った内容を基にして次への実践へとつなげていく。 ・身体的な支援を行う際、身体が大きい生徒もあり、生徒が安全に学校生活を送れるように複数人で支援を行う。 ・部集会を定期的に行い、集団での役割や学びに向かう力等、生きていく上で必要となる自主性、社会性を育んでいく。 2 キャリア教育の充実を図る。 ・キャリア・パスポートを年間計画の中にしっかりと位置付け、進路のステップアップのために活用する。 ・保護者の願いを丁寧に聞き取り、必要な進路に関する情報を積極的に発信し、懇談の機会を有効に活用して進路実現を目指す。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	・安全な学校生活を保障し、個々の実態と課題の把握に努め、豊かな心を育むことができたか。 ・学びに向かう姿勢を高め、様々な方法で自己の意思を周りの人々に伝える力を向上させることができたか。 ・キャリア教育を通して、自己の将来について考える機会をもち、社会参加に向けた力を育むための支援をすることができたか。
取組状況・実践内容等	1 個々の生徒の実態や生活の様子等を複数の教員間で情報共有し、指導を行った。場合によっては二人で介助を行ったり、複数の目で生徒を見守ったりするなど、安全に気を付けながら日々の実践を行った。 2 部集会の係や発表を当番制にして、役割を位置づけた。今年度は各学級での取組を集会の中で紹介する場を設定し、互いを知る機会を設けた。また、挨拶をする場面や自ら話す場面を設け、自ら発信する場の設定を行った。 3 部内で進路に関する情報提供を行い、早めに対応したり、保護者と連携したりした。校内実習やフェスタ等をキャリア・パスポートに位置付け、計画的に取り組んだ。進路については進路担当や保護者との連携を密にして進めた。

評価の視点		評価
1 個々の実態と課題の把握に努め、豊かな心を育むことに繋げることができたか。		☒ A B C D
2 生徒が自己の意思をかかわる人々に伝える力を向上させることができたか。		A ☒ B C D
3 キャリア教育を通して、生徒が自立するように支援できたか。		A ☒ B C D
成果・課題		総合評価
1 ○生徒の実態や日常の様子などを教員間で情報共有しながら、安全・安心に気を付けて指導・支援を行うことができた。また、複数の教員でかかわることができるよう教員間で共通理解を図りながら取り組んだり、活動計画を作成したことでねらいや活動内容について共通理解を図ったりして活動に取り組むことができた。 ○できるだけ二人での介助を行ったり、複数の教員で見守りを行ったりした。 ▲手術等により複数の教員で支援にあたる必要があったり、一人で無理して介助にあたってしまうことがあったりした。 ▲個々の課題や支援方法についての認識や活動の振り返りが不十分だった。 2 ○生徒同士の挨拶や会話を交わす機会や、教師のかかわりを受け入れ、思いを表出する場面が増えた。また、生徒の様子に気付いたり、注目したりする場面も見られた。 ○自分のできることを積み重ねたことで、自ら作業に取り組んだり、より難しい内容に取り組もうとする姿が見られたりした。 ○生徒の実態や表出方法、支援の方法についてかかわる教員間で共有できたことが、生徒の変化への気付きやかかわりの深まりにつながり、生徒の成長や支援内容の向上につながった。 ▲生徒が自分から挨拶する、場面を限定せずに会話する力を高めていきたい。 ▲友達とのかかわりややり取りをする場面を設ける機会を増やしたい。 ▲個々の実態に応じた学習内容や教材の工夫をさらに行っていきたい。 3 ○部会等の場でも積極的に進路に関する情報提供をすることで、早めに対応に当たり、保護者との連携も円滑に行うことができた。 ○校内実習やフェスタなどをキャリア・パスポートに位置付け、計画的に取り組む、評価を行うことができた。 ○様々な機会に保護者の思いや悩みを丁寧に聞き取り、必要に応じた情報を提供したり、就業体験の計画を進めたりした。必要に応じて進路担当に相談しながら進めた。 ○校内作業実習では、実態に合わせた内容を設定して取り組むことができた。 ○D類型の生徒に対して、教員を軸とした人とのかかわりを大切に支援ができた。 ▲進路に対する保護者の願いと実情のギャップを埋める。 ▲卒業後の活用を見据えたキャリア・パスポートの作成を考える。		A ☒ B C D
来年度に向けての改善 方策案	1 今後も教員間で共通の視点をもって実態把握を行い、客観的な視点で生徒をとらえ、支援にあたる。個別の指導計画や支援計画、キャリア・パスポートを有効的に活用し、計画的に指導にあたれるようにする。 2 部集会を継続して行い、個々の生徒の活躍の場を設ける。 3 生徒や保護者のニーズを丁寧に聞き取り、進路決定に向けて適切な進路支援ができるようにする。そのために必要なねらいや目標を明らかにする。	

学校関係者評価（令和6年2月5日実施）

意見・要望・評価等	
・卒業後の進路に向けて、キャリア・パスポートを有効的に活用できるとよい。	
・部集会等で生徒が活躍できる場が設定されていてよい。	